

財団法人 新潟県建設業協会会長賞

『夢』を形に」

株式会社 笠原建設 建築部 斉藤 洋平

私が現在の会社に入社して1年と4カ月が経ちます。建設業に関心を持ったのは私の確かな記憶をたどれば、高校の進路について悩んでいる時だったと思います。その時は単純に家やビルが出来るには一体どれ程の時間や人手がかかるのだろうか。自分もその仕事に関わってみたいという思いでした。

しかし、本当の思いはもっと昔にあったことに最近気付きました。

私が小学校の頃、近所に新築の住宅が建てられました。それは三階建てで、エレベーターがあり、天気の良い日には屋根がきらきらと輝く、まだ茅葺き屋根の家が残るこの田舎にはあまりにも衝撃的な家でした。

私はいつも学校が終わるとその現場へ行き、工事を眺めるというのが子供ながらの毎日の日課となっていました。

毎日、毎日現場へ行けば当然工事も進み、家も完成に近づいていく。当然ながら当時の私は建築の知識等は全く無く、次はどうなるのかはなんて分かりません。そんな私に気付きいつも優しく、子供の私でも分かるように教えてくれるある男の人がいました。

その人は眼鏡をかけ、体が大きく、顔にはヘルメットのあごヒモの日焼け跡が残る少し強面なおじさんでした。今になれば分かりますが、その人は現場監督だったのでしょう。

きっと忙しいのにも関わらず、私を見つけると満面の笑みで、「何か分からないところはあるか。教えてほしい事はあるか。」と話しかけてくれました。細かい図面を広げ、眼鏡を指で直して指を差し、「ここがトイレなんだよ。この家には広い庭があるんだよ。これが一番お客さんに気に入ってもらっているんだよ。」と、まるで自分の家を自慢するかのよう色々と教えてくれました。図面がない時には腰をかがめ、地面に絵を描いて教えてくれました。

それから約3カ月後、完成してという話を聞き、行ってみると庭先におじさんが一人立っていました。家を見上げ、満足そうな笑みを浮かべていました。私はその時の顔を一生忘れる事はできないでしょう。これが私の建設業に興味を持った始まりだと言えます。

実際にこの仕事に就き現場に出てみると多くの人たちが現場を見えています。その中には小さい子供もいます。自然と昔の自分の様に思う時があります。きっとこの子も見ていて楽しいに違いない、もしかしたら近い将来この建設業に進むかもしれない。その為にも良い思い出となるような現場にしたいと思いました。

現在世の中は厳しい就職難であると言えます。若者たちは「夢」や「憧れ」を抱きながらも自分の望んだ道を進めない者もいるでしょう。私は幸いにも今こうして建設業で働かせていただいています。その感謝の気持ちを忘れることなく日々精進していこうと思います。少しでも早く一人前となり、お客様、そして私自身の「夢」が造れる建設業に生きる一人の男になりたいと思います。